

## 李光耀と朴正熙、近代の魅惑と植民の眩惑

黄 秉周（翻訳・朴 海仙）

### 一 はじめに

一九七九年一〇月一六日、李光耀は五泊六日の日程で韓国を訪問し、朴正熙に出会った。一〇月二一日、李光耀が帰ってから一週間も経たないうちに一〇・二六事件が勃発した。李光耀は、朴正熙が出会った最後の外国指導者であった。ふたりは頂上会談を設けて、互いの領導力を賞賛して、経済協力の強化を約束するなど、和気藹々とした雰囲気を出した。後日李光耀は、自分が英国の影響を受けたことと同様に、韓国の指導者らが日本の強力な影響を受けていたかのように見えたと所感を述べた（一）。

かかる李光耀の指摘は極めて的確であると思われるが、ふたりと韓国・シンガポールの両国家には第二次大戦以後のアジア地域における急速な産業化と国家形成過程 (nation building) という興味深い事例が共通して見られる点からも注目されてきた。ふたりと両国家は、互いが置かれていた条件の相異にも拘わらず、植民地経験から深い影響を受けた点においては同一であった。すなわち、その経験に基づいて自らの営みと nation building を追及したのである。韓国とシンガポール

は産業化を成し遂げた、もつとも成功的な脱植民国家として評価される。

シンガポールは、二〇一五年 IMF 基準によれば国民一人当たりの GDP が五三、六〇四ドルを記録し、カタールに継いでアジア二位、世界七位になった。これは、韓国はもちろん香港や日本も軽く追い抜いて、実質的なアジア一位に該当する。自家を所有した国民が九〇%で住宅問題がほとんど生じず、街には捨てられたゴミ、ポイ捨ての皆無な国でありながら、二〇一一年から一三年にかける三年連続で国家清廉度五位に位置する国家でもある（二）。このような驚くべき変化を招来したシンガポールと同格に捉えられる人物がまさしく李光耀である。韓国の平凡なる市民ならば、ここからあまりにも鮮やかなデジャヴを想起するはずである。というのも、かつての数十年間、韓国もシンガポール同様の劇的変化を経験したからである。韓国戦争直後の世界最貧国から、経済規模において世界一〇位圏を横断する資本主義産業国家となり、シンガポールと李光耀と同様朴正熙も韓国の産業化と切り離せない関係を成している。シンガポールが李光耀の生物学的連続

性を通じて支配権力を再生産していることも、韓国と同じである。

両国家の国家形成過程 (nation building) は、急速なる資本主義的産業化と国民形成が、まるでメビウスの帯のようにリンクされていることを示している。つまり、国民の形式的包摂が政治的独立によって進行されながら、産業化を通じた国民の実質的な包摂と重なる様相が現れた。両国家の支配権力が生物学的に再生産されたのは、このような二重の国家形成過程という特異性を根拠として見えるように見える。

一方、以上の過程は、両国家において権威主義的支配秩序の形成過程でもあった。シンガポールは英国の植民地時期から複雑極まりない民族・人種・宗教・理念構成を呈してきたが、一九六五年の完全独立以後には李光耀が主導する人民行動党 (People's Action Party) が完璧に近似した一党支配体制を構築した。一九九〇年代以後、動揺の動きは若干あったものの、人民行動党の「一党民主主義」という奇妙な権威主義的政治秩序は、現在までも維持されている。

これに比して、韓国は民族、人種、宗教においての葛藤要素はとくに無いが、左右に分かれた理念対立においては、シンガポールより遥かに強烈に進行された。韓国戦争以後の李承晩政権と朴正熙体制、それに続く軍事政権は、韓国の反共権威主義体制がどのように韓国社会の支配的政治権力構造を構成してきたのかを示している。シンガポールが、非西欧地域の新生独立国家に散見される、軍事クーデターのような軍事的権威主義とは発生論的起源を異にしているとは言え、一党支配に基づいた権威主義的支配秩序を構築した点においては類似した。両国家において、このような権威主義的政治支配構造が社会と住民に

及ぼす影響力はかなり大きい。

驚くべき経済的成功にも拘わらず、現在、両国家の社会的緊張と住民の不満は高い。シンガポールの貧富格差は悪名高いが、二〇%を超えると推定される相対的貧困率にも拘わらず、政府は未だ公式的貧困統計さえも発表していない。とりわけ、このような現状はさらに悪化している。二〇〇〇年代以後所得不平等が悪化し、二〇一四年には上位一〇%の所得が下位一〇%の一八倍に該当する。しかし、政府の再分配機能は微弱であり、可処分所得基準ジニ係数は〇・四一二だが、これは他の先進国より遥かに高い(三三)。このような現状にあっても、国家の再分配機能や福祉システムは失業保険さえ存在しないほど具備されていない。

さらに、周知のとおり、シンガポールの国家統制と司法体系は個人の自由を大きく制約している。街に捨てられたゴミが全然ない状況は逆説的に住民の統制と不自由を担保にこそ可能であった。小さいことにも想像を超える罰金が負荷され、エスカレーター故障を防止するためガムをカムことすら法で禁止する奇妙なるシンガポールの「国家理性」は住民にレヴアアタンとビックブラザーが何であるかをよく示している。

以上の状況から、住民の不満と緊張、ストレスが爆発的に増加するのはあまりにも当然である。その結果、シンガポールの国民幸福指数は世界最低水準から上がれずに未来への希望さえかすかになった。シンガポールの出生率は一九八〇年代から深刻な水準に落ちはじめ、政府の努力にも拘わらず、益々落ちていく。シンガポールの出生率は二

〇〇〇年一・六〇名から二〇一一年一・二〇名へ急激に落ちた。ほぼ全ての動物にとつて、生の危機に遭った時に再生産を諦めるのは自然的な反応であり、人間もまた例外ではないことが証明されている。

豊かさの中の貧困を味わっている住民に国家統制が加えられ、一種の「生物学的ストライキ」が発生したのであるが、国家理性は決して住民の合理性を理解し得ないかもしれない。結局、シンガポールは、足りない労働力を補うため移民を積極的に奨励し、二〇〇〇年以後移民者の数字は七五万四〇〇〇名から、二倍以上の一六〇万名に増えた(四)。現在シンガポールの住民の四分の一をこえる外国人労働者は社会下層を形成し、劣悪な環境の下に過酷な労働に従事している。それでも、外国人労働者が自分らの仕事を奪っていると考える住民からの不満の声は高まる一方である。ここから、シンガポールの国家理性の冷静な見積書が読めそうである。住民の不満が外国人労働者へ向かうなら、外国人労働者こそがシンガポールの経済と政治を安定化するキーワードとなるはずである。シンガポールの国家がどのように自身の支配秩序を構築し維持しているのかを示す事例となる。

ここで、シンガポールとの比較のために、韓国社会の状況を詳しく説明する必要は無い。一〇年以上続いている世界最高水準の自殺率だけでなく、韓国の事情が捉えられる。二〇一三年人口一〇万名当たりの自殺率を見れば、韓国は二九名で世界三位、シンガポールは一〇名に四〇位であった(五)。シンガポールより三倍近く多い自殺者の世界が韓国である。

シンガポールと韓国ともに資本主義的産業化の成功に基づく国民国

家を作ってきたと評価される。先進資本主義国家と互角に渡り合うほど、両国家の nation building 過程は成功的かつ模範的事例として捉えられる。シンガポールと韓国の残酷な現実もまた成功に基づいている。住民集団の再生産が深刻なほど縮まって、自ら生を諦める人が続出するこの世界は失敗ではなく成功の結果という点においてもっとも深刻な悪夢である。

李光耀と朴正熙、このふたりこそが国家的成功談の頂点である。ふたりの成功は国家の成功でありながら、個人の成功でもあったが、彼らの偉大なる「失敗した成功、成功した失敗」を通じて今日の現実を振り返る必要がある。そのなかで、ふたりと両国家の植民地経験は独特の位置を示すように見られる。

すでに触れたように、李光耀はふたりの植民地経験を重要だと思つた。だが、李光耀の指摘は一つの問題を提供する。彼は、ふたりの植民地経験を英国と日本に分けている。すなわち、自分とシンガポールは英国、朴正熙と韓国は日本の影響を強調したのである。これは間違つてはないが、十分でもない。李光耀もまた、日本の影響から自由ではなかった。後日、自序伝を通じて、李光耀は日本軍のシンガポール占領期における経験が自分に大きな影響を与えたことを吐露した。日本軍のシンガポール占領の期間は、韓国の植民地経験に比べられないほど短く、その影響の強度と持続性においても比べられないほどのものであったものの、李光耀が受けた印象はかなり強烈であったそうである。

植民地時期に限らず、戦後においても日本の役割を看過し得ない。

世界的規模の冷戦体制の下で日本は米国の盟邦として東南・東北アジア地域に深く関与するようになった。一八八〇年代初頭、李光耀は米国の世界保安官としての役割を受容しながらも、アジア地域においての米国の朋友は、中国ではなく日本であるべきだと強調した(六)。日本を抜きにして、両国家、とりわけ韓国の戦後は説明し得ない。

さらに、この問題は東南アジアと東北アジア地域の脱植民過程と nation building において重要な問題を提起しているように見える。つまり、独立と国民国家樹立、そして産業化に特徴される両国家の戦後における脱植民過程は近代化と西欧化を意味するものでもあったが、その過程を先取りした日本の経験が重要な参照対象となった。とりわけ、西欧化の無い近代化 (modernization without westernization) 戦略という脈絡において、ふたりと両国家にとって日本は欠かせないモデルであった。

西欧近代を模倣する以外の代案がなかった状況において、国民国家形成と産業化がすぐに西欧化につながることは、ほぼ全ての非西欧社会のアポリアとならざるを得なかった。ナシヨナリズムを必須要素とする国民国家が、自分ではなく他者のアイデンティティーを追求することは、それ自体で形容矛盾に近かった。したがって、西欧近代を追求しつつも、西欧を他者化して自分の独自の nationhood を構築することは不可避な戦略となる。この過程で、日本の近代化経験が主要な参照対象となるのはおそらく当然のことであった。

東道西技・和魂洋才・中体西用は、東アジア三国の初期開化戦略を代表しているが、日本は近代的転換においてもっとも独歩的成果を出

したとも言える。したがって、日本は肯定的であれ否定的であれ、東アジアにおける近代的転換の代表的なモデルとなって、他の国家に強力な影響を及ぼした。たとえば、戦時体制期の近代超克論や思想の強調などは、韓国とシンガポールにも相似して繰り返されたと見える。言い換えれば、韓国とシンガポールは、西欧のみならず日本を通じて自分の nation building を追求したのである。個体の発生が系統の発生を反復することと同様に、韓国とシンガポールは日本の近代化を反復したのかも知れない。

韓国とシンガポールは植民地経験を経たがゆえに、脱植民化と nation building 過程において再植民地の危険を随伴する可能性が濃厚であった。国民国家、経済的生産様式など、近代の諸核心要素とされるものが西欧から起源したものであって、植民地経験を通じてその実体を経験したためである。とりわけ、韓国は非西欧国家の植民地という、稀なケースに属する。非西欧地域のほぼ唯一な帝国主義国家であった日本の植民地として、韓国は日本を通過した近代性の強力な影響の下に置かれていた。シンガポールもまた、英国の植民地に続いて日本軍の占領を経験しながら、少なからぬ影響を受けた。

結局、脱植民過程は、植民母国に相似してゆく過程になる可能性が濃厚であった。日本の近代的転換が成功であったとしたら、韓国とシンガポールはその成功を繰り返そうとした。要するに、韓国とシンガポールにとって、日本と英国は克服の対象であり模倣の対象であるという、分裂的な対象であった。

## 二 植民地経験

一九二三年生まれの李光耀と一九一七年生まれの朴は植民地に生まれ育ち、教育を受けたという共通点を持つ。彼らは植民地経験に熟達していた。李光耀が生まれ育ったシンガポールは、昔から英国の東南アジア植民地経営の中心地に成長した国である。シンガポールは植民母国の理解を充足させるため開発されたゆえに、中国の客家、福建省出身の人々が大量しておし寄せたり、インド人が移住するなどの多様な人種構成を見せていた。よって、土着マレーシア人は益々少数となった。

李光耀の家もまた、曾祖父代にシンガポールへ移住した客家出身である。久しいディアスポラの経験をもつ客家出身だけに、李光耀家はシンガポールに成功的に定着し、英国植民秩序の橋を上り上流層エリートとして地位を確かめた。かかる背景のもと、李は植民都市シンガポールの最高名門校のラッフルズ大学（現シンガポール国立大学）で修学して、英国のケンブリッジ大学の法学を専攻した。要するに、彼は植民都市シンガポールが作り出した最高のエリートコースを歩んできた。

英国植民政府の教育制度が排出した少数のエリートが形成した人脈。その人脈の中では何もかもが手軽く、互いに寛大であった。我らは皆同じ学校に通い、同じ協会に学び、等しい視角と特性をもっていたからである。この点において、言葉遣いや行動様式、格好によって自然と人脈が作られる英国のパブリックスクール

制度とあまり変わらない（七）。

引用した通り、李光耀を作り出した植民教育システムは単に個人を鑄造するにとどまらず、一群の集団を形成した。言い換えれば、英国は自分らの姿を範とした植民地の新たな支配集団を形成し、彼らが植民母国に代わって植民地を管理・経営して英国の支配を保障することを期待した。よって、彼らは英国よりもっと英国らしいエリートとして育つべきであった。「黄色い皮膚、白いマスク」の主体として養成されるべき彼らは、英国の世界支配が作り出した最も大きい成功の一つであった。

李光耀は小さい頃から、英国人が最高で、ドイツ人・フランス人・イタリア人などの白人もまたそうだと思っていた。むしろ、この思いを最初に注入したのは英国人であったが、いつからかその主体はシンガポール人民自身に入れ替わった。李光耀は「白色人種と黄色人種との主属関係は、それをありのままに受け入れるべき自然の摂理だと、祖父と父母から教わりながら育った」と言う。よって、「英国式教育を受けた現地人の中、誰一人も黄色人種の側にたつて人種間の平等を主張した者はいなかった」（八）。後日、李光耀は中国式教育を受けたシンガポール人が強烈な反抗意識を保持していたことに驚いた。

朴正熙もまた、日帝植民地期に最高水準のエリート教育を履修することにより、自らの社会的資産を構築した。朴正熙の学歴は、亀尾公立普通学校（一九二六～一九三二）、大邱師範学校（一九三二～一九三七）、満州国軍軍官学校（一九四〇～一九四二）、日本陸軍士官学校（一

九四二〜一九四四）、国防警備隊士官学校（一九四六）などに渡る。以上の教育課程から見ると、朴正熙は当該期における最高水準の近代教育を履修したことが分かる。

朴正熙にとって教育とは、近代的意味の能力を提供したばかりではなく、社会活動のための多様な資源を提供した。すなわち、彼は教育を通じて社会的関係に対する感受性を磨き、権力関係を経験し、広範な学縁を形成し自らの象徴資本を増やした。何よりも、学力そのものが社会的地位を高める背景であった。

師範学校は日帝が「忠良なる皇国臣民」を要請する一次的責任を背負った普通学校訓練を養成するための官立学校で、「教師士官学校」と言われるほど学則と規律が厳しかった。師範学校生活を通じて朴正熙が一次的に習ったのは、軍事的規律と一糸乱れぬ命令体系、すなわち「軍事的近代性」であり、その影響はのちの士官学校・軍隊経験を経て一生続いていたと思われる（九）。

当時、大邱師範学校は、玄俊懾事件をはじめ、社会主義に関連した学生の動きが活発したため、一〇〇名に達する朴正熙の同期生の中で三〇名が退校に処置されるほどであった。かかる状況にも、朴正熙が社会主義に関心を示した証拠はなく、植民体制に対する根本的な問題意識もなかった。その代わり、彼は普通学校訓練の義務服務機関を満たすや否や、すぐ軍人の道へ飛んでいた。

日本人として恥ぢぎつだけの精神と氣魄とを以て一死御奉公の堅い決心でございます。しつかりやります。命のつゞく限り忠

誠を盡す覚悟でございます。（中略）一人前の滿洲國軍人として滿洲國のため延いては祖國のため何で一身の榮達を欲しませう、滅私奉公、大馬の忠を盡す決心でございます（後略）（一〇）。

年齢制限のため軍官学校入試に二回も落ちた朴正熙は血書を送ったという。軍官学校入学を嘆願する朴正熙の血書は、形式と内容の全てにおいて、ただ一つ、死に圧縮される。朴正熙にとって、より大きな権力への上昇欲望が停止されることは死ぬことと同様であった。朴正熙の把握した世界は、垂直の秩序であった。彼は一生をかけて、水平的關係に頗る衰弱性を示すが、普通学校級長以来、彼は上下關係が明らかでない世界に慣れていた。これには、植民地秩序の影響も大きかった。植民地秩序は、水平的連携や民主主義の代わりに垂直的位階や一糸乱れぬ系統的秩序を構築しようとした。平等を強調した近代社会も、水平の無秩序は単に垂直の秩序を正当化する仮設に過ぎず、出世は垂直運動法則の世俗的表現であった。垂直の世界で生き残ることは、無限大の上昇運動を繰り返すことを意味した。

後日、どうして安定した普通学校訓練を辞めて軍官学校に志願したのかという質問に、朴正熙は「大きい刃物を帯びたかったから行った」という一言で答えた。この答弁は、彼が把握した世界が何であるかを雄弁する。「大きな刃物」に象徴される権力に対する熱望を抱いた主体を育ちだしたのは、日本帝国主義に他ならない。自分を支配する支配者の欲望を、自分の欲望にした植民地化された被支配者として朴正熙も例外的存在ではなかった。彼が命がけの跳躍を通じて同一視しようと

した日本帝国の威力は、同じく李光耀も経験したものであった。

李光耀は、「敗戦が迫ってきたにも拘わらず、毅然とした態度を失わない彼ら（英国軍…引用者）に私はかなり感心した」というが、その英国軍を一挙に破った帝国日本の威力に圧倒された。日本軍がたった二週で、一一万の兵力で、一三万の英国軍を敗退させたことから、李光耀は英国にたいする幻想を破った。彼は、英国によって構築された英国の優越性に対する神話を、説得力をもって受け入れていたが、「アジアの一族が果敢に立ち上がってそういう虚想を破ったこと」に大きな衝撃をうけた（一一）。

李光耀は日本のシンガポール占領以後には日本語学校に登録して日本語を学んだり、日本軍に雇用され仕事をするほど卓越した現実適応力を見せたが、日本占領の経験を以下のように回顧している。

三年半の日本軍占領期間は、私の人生でもっとも重要な時期であった。あの頃、私は人間という存在の行動様式と人間が集まって暮らす社会、人間の欲求と衝動の本質に対して色んなことを感じた。政府の絶対的必要性、そして権力こそが革命的变化を主導し得る最も効果的手段だという点は、もし私が占領時代を経験しなかったら絶対理解し得なかつたはずだ。（中略）日本軍の野獣性と武力を体験しながら、なるほど何が上と下を決定し、何が人々を服従させ、ひいては忠誠させるのかまで、確実に目撃した（一二）。

李光耀は本質的に暴力に基づく権力の属性と様態をもっとも赤

裸々に経験したのである。彼は、この経験が、自分の一生においてもっとも重要だったと告白した。それは多分そんなに違っていないが、朴正熙にとつても、日帝時代の軍事的経験が一生のもっとも重要な体験のように思われる。ふたりとも、当該期アジア最強の日本軍を通じて自分と世界を把握する方法を学んだとも言える。日本帝国は、英国軍だけではなく、何よりもアジアの被植民者に対しても勝つたのである。この勝利は、日本の第二次大戦の敗北にも拘わらず、李光耀と朴正熙の間には依然として生き残っていた。

私は英国にある法大に進学するために、小さい頃から英語学校に通っていた。私の夢は、法大を卒業し、教養のある英国紳士の如き者になることであった。それが何であるかはよく分からなかったが、とにかく皆から完璧の標本と言われる英国人に比べても遜色のないような人になるためである。私は成長して英国にある法大を卒業した。しかし、心の片隅では、なぜか何かが間違っているという考えに常に苦しんでいた。私が政治に入門するもつと前のことだが、結局私は自分が追求したあらゆる価値が根本的に虚構なものであったという事実気がついた（一三）。

戦後、李光耀は小さい頃の夢を叶えて、英国最高の名門ケンブリッジ大学を卒業して弁護士になったが、彼は英国紳士の代わりに「一党民主制」という、奇妙なる「アジア的価値」を主張するようになった。彼にもっとも重要だったのは、英国のケンブリッジ大学ではなく、日

本占領の三年半であった。解放の後、朴正熙を捕えていたのも、日本の代わりに登場した米国ではなく、「明治維新の志士たち」であった。李光耀が一番目の植民母国を否定し、二番目の植民母国に強烈な影響を受けたことに比して、朴正熙は一番目の植民母国の強烈な影響から脱したことはない。彼にとつて米国は現実的に拒否できぬ力ではあったが、範として学ぶべき同一視対象とはならなかった。

それにも拘わらず、李光耀の英国留学経験と植民母国の影響は相当な痕跡を残した。彼が留学した前後の英国はアトリーの労働党集権期で、「揺り籠から墓場まで」という福祉国家モデルが具現されていた。李光耀はヘロルド・ラスキの講義から大きな影響を受けたり、フェビアン社会主義の信奉者ともなる。彼だけではなく、他のシンガポールとマラヤ出身の学生は改革を主導する労働党政府の公明盛大さと合理性に深く魅了され、平和的な政権交代と富の再分配を可能にさせる英国政治体制の包容力と憲政秩序の成熟を羨んだ（一四）。

それでも、李光耀は帰国する頃、「強い政治意識をもつ反植民主義者」になっていた。彼は自分を「左翼民族主義者」と捉え、「李光耀」という中国式名前が自分のアイデンティティーを代表すると確信した（一五）。元来、彼の親が付けた名前は「ハリー李光耀」だったが、李光耀は自ら「李光耀」に改名した。英国の痕跡を消して、中国客家出身というアイデンティティーを選んだ彼の選択は、果たして彼を「アジア的価値」の体現者にさせたのか。英国と日本という、二つの植民母国と相俟って中国が複雑に絡み合っている混種の主体として、李光耀は植民化と脱植民化が交差するアジアを象徴するのではないか。

朴正熙の場合はどうか。朴正熙もまた、解放以後「左翼民族主義者」と解釈できる余地を見せる。彼の南労党加入は、日本の陸師出身という過去と奇妙に絡み合う。彼は、解放後にも続く日本の軍事的影響力から自由にはなれず、米国式自由主義を一生かけて不満に思っていた。酔ったら日本の軍歌を好んで歌ったり、自分の人生でもっとも劇的な場面の五・一六クーデターを「明治維新の志士」の心で行った。しかし、彼は「民族中興」「祖国近代化」を賭けて強烈な民族主義政治を見た。李光耀のように、「民族的民主主義」「韓国的民主主義」などのタームを通じて、西欧とは区分される民族的何かを構成しようとした。確かに、ふたりとも、植民母国と断絶しつつも、その影響からは逃げられなかった。ふたりとも、強烈な反西歐志向をしながらも、西歐近代の富国強兵と資本主義的産業化を通じて自分らの民族的課業を達成しようとした。要するに、ふたりとも、自分の国家と民族を植民母国のようにしようとした。植民者の方法によって、植民者よりはるかに優れた国を作ろうとした彼らの姿は、グランシーの言う受動革命を思い出させる。ここで、ふたりの受動性を規定するのは、植民母国の能動性である。ふたりは、受動革命の能動的主体にあたるが、脱植民化のように見える再植民化した主体行為とも言える。

### 三 開発主義と権力…資本が醸し出した国家

李光耀と朴正熙、ふたりとも、経済開発が最高の業績として評価される。経済開発は、他の問題点を黙認するほどの業績だと捉えられる。逆説的に、経済開発を除けば、ふたりの業績は急転直下の評価になら



ざるを得ない。それほど、経済開発はふたりを評価する上で欠かせないところである。

ふたりの経済開発方式は、類似性もあるが、少なからぬ違いも存在する。まず、ふたりとも、強力な国家主導性とともに、世界市場との関係を最優先とする経済開発方式を採択した。李光耀のシンガポールは、一九六五年に独立した直後から、徹底的に世界市場の動向を自国の経済発展と結び付けることに力を入れた。シンガポールの産業化戦略の独特さは二点に分けられる。一番目は、主要基幹産業と公共サービス部門が国家によって独占され、官僚集団が国家企業を掌握することによって、事実上資本が排除された、国家と労働の二者同盟的組合主義が建てられたことである。二番目は、多国籍企業を積極的に誘致して、彼らと共存する成長政策を推進したことである(二一六)。

朴正熙政権の経済開発政策も、強力な国家主導性に基づいたものであったことは、付言を要しない。また、シンガポール同様、韓国の経済発展は資本と技術はもちろん、その市場までも海外から調達する方式であった。すなわち、韓国とシンガポールの急速な産業化の主要な背景は世界資本主義体制であった。すでに蓄積された資本と技術、十分に成熟した既存の市場を活用することによって、後発者の利点を活かした。もちろん、このような産業化戦略は、対外的依存性を高めて経済の不安定性と不確実性が強化される問題が露呈するが、とにかく短期間に急速な産業化を可能にし得た。

両国家は互いを参照しながら、自分らの開発主義を強行した。韓国の言論はシンガポールを「繁栄する東洋の真珠」と描写しながら、ア

ジアにおいてシンガポールが日本の後を継いで一九七二年一人当たりの国民総生産が一〇〇〇ドルを超えたと褒めていた(二一七)。一方、李光耀は米国まで行って、治安確保とともに経済発展のみが共産化に対抗する方法だと強調しながら、韓国がその成功を成し遂げたと賞賛した(二一八)。また李光耀は、中東に一〇万名の韓国労働力が進出したことを挙げて、彼らの勤勉性を見習うべきだと主張したという(二一九)。

一九七九年李光耀の訪韓を前後にし、韓国の言論はシンガポールの経済的成功を相当詳しく報道していたが、とくに公共住宅・医療・教育などにおいて国家の社会保障がかなり成功裡に確保されたことを伝えた(二二〇)。『京郷新聞』は一九七九年一月一六日の社説「李光耀首相の訪韓」にて、シンガポールの経済成長を「東南アジアの奇跡」と表現し、中進国間の協力必要性を強調した(二二一)。『毎日経済』も、対外的中立と対内的反共政策を強調して、李光耀の訪韓の意味を説明した(二二二)。

世界資本主義体制に依存度が高い国家主導の成長戦略という点においては類似していたものの、その具体的な様相は大分異なった。シンガポールは、国家が資本の役割を担っていて、相対的に民間資本の形成は微弱だった。言い換えれば、国家こそが最大の資本家であって、労働とも直接結合する方式を取ったのである。その他の主要な資本を担当したのは超国籍企業である。要するに、シンガポール経済の主要メカニズムは国家と超国籍資本の結合である。李光耀は、「多国籍企業は第三世界国家の従属を深化させるのみだとする、従属理論には耳を傾けず、その代わりに彼らを周到綿密にシンガポールに引き寄

せた。多国籍企業は、資本と技術、ノウハウと市場を有していた」と判断した(二三)。

これこそが、自由放任でも、社会主義でもない、半社会主義・半資本主義的実用主義と中央集権的政治風土を作り上げた中核であった。李光耀個人の政治的性向にもかなり類似したこのシステムは、共產主義を専有した人民行動党の特性にも連関する。そもそも人民行動党はマレーシア共產主義の勢力との連合戦線によって誕生し、一九六五年独立の前後までも同床異夢の提携関係を維持した。李光耀は共產主義者の戦術と大衆政治技術を積極的に受容し、それは政策分野においても同じであった。英国労働党の影響、マレーシア共産党の影響などによって、人民行動党は左派的色彩を強く帯び得たが、他方においては英国と世界資本主義の強力な影響の下にあった。

その結果、シンガポール独立闘争の過程において、李光耀と人民行動党は「国民を搾取する資本家だと英国を排斥したが、今は資本家こそが仕事を創設し得る勢力であると、国民に説得せねばならなかった」(二四)。つまり、左派的志向と戦術、政策を専有しながらも、資本主義的産業化の道に邁進するヤヌスのごとき存在が李光耀と人民行動党であった。このような姿は、強烈な左派民族主義的性向を見せた東南アジア地域の独立運動勢力とも類似していた。李光耀は、インドネシアのスカルノ、ビルマのアウン・サンのように社会主義的道を模索した流れと連動する存在であった。

だからこそ、当時の韓国の言論は、シンガポールの独立がアジア地域における反共戦線の弱体化に帰結する可能性を憂慮していた。たとえ

ば、『東亜日報』はマレーシア連邦から独立したシンガポールが左旋回することを憂いていた。すなわち、マレーシア連邦を「新植民帝国主義の所産」と批判したスカルノのインドネシアと対立しながら、東南アジア地域の反共ブラックにおいて重要な役割を果たしてきたマレーシア連邦が弱体化することを危惧していた(二五)。この社説は、李光耀が社会主義者だと知られていること、また国内的にも社会主義的政策を相当採択していることを紹介している。

だが、李光耀の反共主義的立場はかかる危惧を要しなかった。一九七八年、李光耀は米軍の撤収やアジア太平洋地域における周辺国四強(米中日露)の勢力均衡などを勘案すると、日本の防衛力が不可避で、日本の防衛力が不可避である立場を披瀝した。つまり、日本の自衛隊が適切な装備を備えるのは、戦略的にも意義のあることはもちろん、経済的にも意味があると指摘した(二六)。彼は反共と経済開発のために、積極的に日本の再武装を注文していた。

また、朴正熙体制も国家の役割を極大化したが、シンガポールのように国家自身が資本になる戦略を採択してはいなかった。初期の国営企業が相当存在したが、一九六〇年代末からは漸次私有化された。大韓造船公社を私有化して、現在の韓進中工業となったのが代表的である。その代わり、朴正熙体制は国内の私的資本を集中育成しながら、超国籍資本の直接投資を統制した。これは、ラテンアメリカの諸国とも区別される特性であったが、その分、国家と資本との関係が複雑に絡み合う結果を招来した。

すでに、一九七〇年代中後半に至って、財閥の経済的支配力は多く

強化されていた。一九七三〜七八年の間の国内総生産は九・九%増加したが、四六大財閥は二二・八%増加し、国内総生産に占める比重が九・八%から一七・一%に高まった。とりわけ、下位二五個の財閥の年平均成長率が一二・八%であることに比して、上位五大財閥のそれは三〇・一%に達して、独占規模が成長率と正比例関係をなしていることを示している(二七)。「権力が市場に移行された」というくんだりは一九七〇年代中盤からすでに実際現象となった。財閥中心の韓国独占資本は、一九七〇年代から社会の支配勢力として立志を確固にしはじめた。医療保険を主導したのも全経連であって、主要スポーツ団体長のほぼすべてを、企業の社長が掌握したのも七〇年代であった。主要財閥企業の多様な文化財団が集中的に設立されたのも同じく一九七〇年代であった。

よって、当時の核心経済官僚の一人であった姜慶植は、この状況を「企業と管理との戦いでは、管理が百戦百敗」という言葉で表現した。このことはすなわち、「権力が市場に移行された」ことを吐露したのであるが、一九七〇年代末の第二次オイルショックを機に入案された経済安定化施策がもはや(新)自由主義的市場経済への道であることを明らかにした(二八)。これを象徴的に見せたのが一九七八年のハイエクの訪韓であった。全経連の招請に応じて韓国を訪問したハイエクは、新自由主義の伝道師役割を自任した。

一九七〇年代は、政治的側面においては、維新体制に象徴される反自由主義的抑圧秩序が主軸をなしていた反面、経済的側面においては新自由主義への道を歩んだといえる。また、維新体制に抗した民主化

運動も、内容的側面においては自由主義的価値に基盤をおいたものが大部分であった点からすると、政治的側面も同じく自由主義的傾向が大勢となっていたと思われる。維新体制という反自由主義秩序こそが、自由主義政治運動を活性化し、すこぶる媒介となる逆説が成立可能であった。一九八〇年代まで続いた反自由主義的軍事政権を克服していく民主化運動の歴史が韓国の自由主義の歴史だと言っても過言ではないだろう。

李光耀とシンガポールは確実に朴正熙と韓国との奇妙なる対照をなす。一九七〇年代に朴正熙体制が反自由主義の旗を掲げて維新体制を成立させた後に、悲惨な失敗をしたとすれば、シンガポールは一九七〇年代末から反自由主義的キャンペーンを本格化した。シンガポールは経済成長によって西欧の自由主義と個人文化が流入すると、一九七〇年代末「アジア的価値」を掲げて学校ごとに宗教教育を教えたり、忠孝教育のため中国系住民にマンダリン語を教育させ中国古典の価値を拡散させようとした。

人民行動党の綱領は、実用主義・能力主義・多人種主義・アジア的価値など四つの核心イデオロギーを規範とするが、李光耀のアジア的価値概念はつぎの六個にまとめることができる。一、日本・中国・韓国・ベトナム地域から起こり、二、儒教的本性を持ち、三、西洋と東洋社会の間には根本的な文化的差異が存在し、四、共同体主義がその根本的差異であって、五、教育・勤勉・節約を含めて、六、かかるアジア的価値がシンガポールの成功に寄与した(二九)。

以上のように、アジア的価値を強調した李光耀が念頭においたのは、

成功モデルとしての日本であった。彼から見れば、日本は西欧化無しで近代化が可能であった非西欧国家であり、産業化された社会にも拘わらず人間関係においては本質的に日本的な社会であった(三〇)。朴正熙が明治維新を高く評価したことで同一な脈絡から、重要な参照モデルとして日本がまた登場した。

朴正熙もまた一九七〇年代から非西欧近代化戦略を本格化する。維新体制成立を前後し、朴正熙は「韓国的民主主義」といったスローガンを掲げて、いわゆる「民主主義の土着化」を主張しはじめた。要するに、ふたりは一九七〇年代から非西欧的民族主義談論を本格的に強化し始めたが、その背景はアイロニカルにも、自分らの成功そのものであった。ふたりが核心政策として強調した産業化が成功し、両社会は本格的都市化・大衆社会化を経験するようになった。かかる傾向が自由主義や個人主義のような西欧的価値と慣習の拡散につながるのには確かであって、それに加えて資本主義的産業化が招来する社会的葛藤と敵対が劇化せざるを得なかった。韓国では全泰壹の焼身自殺や光州大団地事件が発生し、シンガポールでも人種及び階級葛藤に続いて麻薬のような新たな社会問題が生じるようになった。要するに、産業化に伴う新たな社会葛藤に抗して、民族主義的統合原理が新しく提示されたのである。

一つ興味深い点は、朴正熙は韓国的民主主義を強調した反面、李光耀はアジア的価値を取り出したという点である。韓国において、一九五〇年代まで西欧に対抗する主体は韓国よりも東洋であった。すなわち、西欧に向き合う主体として国民国家よりは東洋という地域概念が

もつと頻繁に動員されたのである。国民国家としての自信とアイデンティティーが微弱な状況の反映であったと思われる。だが、一九六〇年代以後、民族主義談論が強化されるにつれ、東洋の代わりに韓国、または民族が重要なキーワードとなった。反面、シンガポールの李光耀がアジア的価値を主唱しはじめたのは一九七七年であったが、国民国家ではなくアジアという地域概念が使われた。多人種社会であって、最小限の共通分母をアジアという地域に設定せざるを得ないシンガポールの位置が反映されたと思われる。とにかく、ふたりが唱えた非西欧的価値に対する強調はすなわち民族主義的統合の言説であった。その起源は互いに異なっているように説明されてきたが、韓国的民主主義とアジア的価値はほぼ相似した指示対象を持っていた。

近代化が招来する各種葛藤と分裂、危機を縫合するために文化的伝統を強調するのはほぼ全ての社会において一般的様相である。一九三〇年代日本の保守的知識人は戦争と帝国主義により軍事化した状況のなかで社会統合のために自分らの文化的伝統として「和」概念を強調した(三一)。

同様に、ふたりとも西欧の自由主義を極度に嫌悪して、集团的倫理と道徳を強調しながら権威主義的政治秩序を構築しようとした。韓国の朴正熙は長髪とミニスカート取締を通じて反自由主義的規律社会を追求したが、李光耀のシンガポールはヒッピー族を社会汚染の癌と捉えて集中取締を行ったこともあった(三二)。韓国は民主化運動を通じて自由主義的価値が全面に登場し、政治や経済はもろろん社会文化的にもヘゲモニー的支配力を行使するようになったが、シンガポールは

韓国とは異なる様相を呈している。亀裂のきざしはあったものの、シンガポールは依然として李光耀が構築した反自由主義的権威主義秩序に基づいて統治されている。シンガポールは政府の経済介入、慈悲深い専制政治、個人主義的な集団主義、統制された開放、非序列的な序列体系などを特徴にしながら、アジアにおいてもっとも成功的な権威主義秩序を維持しているように見える。その権威主義的秩序確立と維持のため、李光耀が強調したのがすなわち人民の生活向上であった。

アジアの数百万に至る貧しい大衆は、理論を気にするか、それを知ろうともしない。彼らはよりましな生活を望んでいる。彼は一層均等な正しい社会を求めている。それを支度するものがつまり彼らの救済者である。民主社会主義者は独立以後にも大衆を組織化するにおいてより多くの努力を注がなければならない。彼は、よりましな生活向上の意欲が彼らの力を団結することにあるという激励と熱意を呼び起こすよう納得させねばならない。そのためには、資本蓄積と高度化した技術知識の獲得を促進することが生活向上において必要不可欠なことであることを納得させねばならない。共産主義克服のため、民主社会主義者が努力すべきである(三三三)。

李光耀は、独立以前から早くも大衆の組織化と生活向上を叫びながら、資本蓄積と技術知識獲得に盛り上がっていた。民主社会主義を信奉しつつ、共産主義克服のため共産主義大衆政治技術を借用し、人民

の生活向上を掲げた李光耀の戦略は、全人民の自産家化を追求することであった(三三四)。そのために、李光耀が動員した戦略が労働組合を専有する組合主義であった。

李光耀政権は、まず、全国労働組合平議会(NUTUC)を掌握し、労働組合統制を図った。主要なる方式は強制と包摂であったが、一九六七年保健部の新たな労働制度の導入に抗してストライキが主要な契機となった。このストライキに対して、李光耀政権は強硬策に出た。労働法改正を通じて主要基幹産業においてストライキ禁止措置などを取ったり、労社間の造化を強調する新たな労働運動を導入しようとした。一九六八年一月、英国軍撤収計画発表はもうひとつの転機であった。英国軍駐屯は当時のシンガポール国内の総生産の二〇%を占めるほど大きな比重であった。英国軍撤収計画の発表でシンガポールは混乱した状況となり、一九六八年四月総選により李光耀は圧倒的勝利をなし、本格的な労働組合統制に取り組めた。雇用法・労社関係法・労働組合法などを新たに制定または改訂して、経営権悪化・労働組合弱体化を押しつけた(三五五)。

しかしながら、何よりも注目されることは、李光耀が労働組合を積極的に包摂しようとした点であるが、とりわけNUTUCを一種の企業のように変貌させた点である。NUTUCは一九七〇年に運輸会社を設立し、一九九四年には一万台のタクシーを保有した巨大企業に成長させ、また生命保険と自動車保険会社を立てた。NUTUCは事業分野を拡大し、公共医療施設・児童保護・放送局・リゾート・ホテル・ゴルフ場を運営し、コンドミニウム事業にまで拡大した(三五六)。

このような状況で、労働組合は単なる労働組合にとどまらず、資本運動の一主体に転化される。労働者代表組織であって直接経営に参加する経営者であり、同時に資本家でもある労働組合は、シンガポール経済の重要な一軸をなしている。このように、労働者が労働組合を通じて資本の一部を構成するようになり、労社関係という伝統的階級構図の代わりに利益共同体の取引関係がより重要となった。くわえて、シンガポール住民の大部分は、国家を媒介に住宅を所有するようになった。

そもそも、李光耀と人民行動党は社会主義的志向を強く帯びていた故に、自由市場経済がもたらし得る数多い不公平な結果を調整するための国家介入に慣れていた。代表的なのが住宅政策であったが、これを主導したのが住宅開発庁(HDB)である。住宅開発庁は、中央厚生基金を通じて労働者と会社が同一な比率で基金を積み立てさせ、その基金を利用してほぼすべての住民に自分の住宅を所有させた。現在、シンガポールの住宅所有率は九〇%を上回る。

李光耀は世代主が住宅を所有しないと、政治的安定を成し得ないと確信した。国防の義務を遂行する息子をもつすべての父母に、その息子がシンガポールを守護すべき大義名分を提示すべきだと判断したのである。軍人家族が住宅を所有しなければ、その軍人は自分が富裕層の財産を守るために戦っていると思うおそれがある。李光耀は、「このような所有意識こそが、我らのごとき根深い共通した歴史的経験を持たない社会では極めて重要であると思った」(三七)。

人々が自分の所有したアパートを、賃貸アパートを管理する時とどれほど異なる方式で管理するのかを観察したのちに、私は人間の内的なところに、財産に対する根深い本性が降ろうとしていると思うようになった。一九五〇年代から一九六〇年代全般にかけての暴動期間中、暴動に参した人々は車のガラスに石を投げ、車を覆し、燃やしたりした。しかし、一九六〇年代中盤に暴動が起った際には、すでに自分の家と財産を所有した人々の行動は異なった。私は若者が道に止めた自分らのスクーターをHDBの建物階段の上に安全に運んでおくことを目撃した(三八)。

李光耀は、「我らはすべての人々に公平な自分の割当を持たせる社会主義を信奉した。そのあと、我らは個人的な動機と補償こそ生産経済の根本であることを学んだ」(三九)とした。社会主義と資本主義市場経済を、一つの体制と秩序に統合しようとした戦略が李光耀と人民行動党が取った基本的姿勢であったように見える。だが、もともと基本的な前提とは、私的所有権に対する絶対的承認であった。私的所有権の諸主体からなる社会主義的共同体、これがまさしく李光耀が夢見た秩序ではなからうか。よって、李光耀が想定する望ましい主体とは、所有権を合理的に行使して管理し得る主体、自分の生を経済的効率性と合理性によって規律できる主体である。

我が人口の五%ほどは、つねに、責任感なく無能力な人々が満ちしている。そんな人々は家だろが株式だろが、財産なる財産は

全部遣ってしまふ。彼らは自己訓練が出来てないまま、明日のた  
めの計画や予算を備えておくことが出来ない。彼らは未成年者の  
ごとく世話をみるべきである。我らは彼らなるべく独立的にさ  
せて、彼らが福祉施設にて生を終わらせないように努力すべきで  
ある。(中略) 西洋では、自由主義者が、恥も知らずに自分の権  
利を要求するように人々をそそのかし、福祉費用がとつともなく  
立ち上がった(四〇)。

引用した通り、李光耀は五%の無能力で自己管理及び財産管理の不  
可能な存在を通じて社会全体を規律しようとした。五%の人口さえ、  
国家福祉が負担してはならないという彼の信念は、自由主義者の主体  
認識とは距離が離れているように見える。しかし、李光耀が言う主体  
とは、徹底的に所有権的主体である。住宅と株式、そして財産を合理  
的に管理し経営し得ない主体とは、真正なる主体ではない。かかる展  
望の下に、自由は所有権的主体の所有権的自由となる。全ての存在が  
所有権を媒介に説明されて正当化されるこの体制こそ、その基底に自  
由主義の価値を蓄積するようになる。財産と教養を備えたブルジョア  
という展望がシンガポールでも依然として貫徹されているとも言える  
が、ここでの教養とは、財産を管理して経営し得る知識の派生商品の  
ようにとらえる。

シンガポールの所有権的自由が韓国においても同一に貫徹されてい  
たことは確かである。さらには、かかる自由は、維新体制さえもやむ  
を得ないものであった。朴正熙は機会があるたびに利己主義と個人主

義、物質万能主義を西欧の墮落した風潮として慨嘆しながら、「小我」  
の代わりに「大我」になることを注文した。だが、大我という抽象的  
集団主体が現実の生存を保障しない限り、全ての存在は小我としての  
生存を図るべきであった。生き馬の目を抜くような殺伐なる生の競争  
を、万人が直面せざるを得ない条件にしておき、その条件を乗り越え  
て大我への超越を注文することは自己撞着の典型でもあった。このよ  
うな点において、李光耀の所有主体化戦略は、朴正熙の大我よりも遥  
かに効果的であった。大我に所有された小我よりは、住宅を所有した  
小我の忠誠度が遥かに高いはずである。要するに、ふたりは資本から  
醸し出した国家を互いに異なる方式によって追求した。

あいにく、李光耀が韓国を訪問した次の日であった一九七九年一〇  
月一七日には、釜山と馬山から反政府示威が激烈に展開し始めた。朴  
正熙体制期において最大の大衆抗争である、いわゆる「釜馬事態」が  
発生したのである。朴正熙体制の最大成果とも挙げられる経済開発の  
最大の恵沢を被った地域の一つである韓国の東南地域から、朴正熙政  
権を没落に導いた大衆抵抗が始まったという点は、歴史のアイロニー  
でもある。単純に比較すると、朴正熙体制の大衆包摂は、李光耀のシ  
ンガポールほど効果的ではなかったとも言えるだろう。

#### 四 結論

シンガポールの街には、捨てられたゴミ、ポイ捨てなどが全くない  
と言われる。綺麗でよく整理整頓された街ときたら、日本の都市が有  
名だが、シンガポールは日本の都市を凌ぐとも言われる。だとしたら、

シンガポールはおそらく世界でもっとも綺麗に管理される都市ではなからうか。だが、シンガポールからマレーシアに超えた瞬間、道路はゴミだらけとなる。一生にかけて綺麗な街のため極度に気を付けたシンガポール人が、マレーシア国境を超えたたん、あらゆるゴミを車窓から投棄するからである。さらには、捨てる必要のないものさえも取って投げ捨てる。シンガポールでは禁止された売買春がマレーシアにおいては繁盛しているが、その主要顧客はシンガポール人であるとも言われる。

李光耀は、人間が全体のために献身するほど偉大ではないと確信した。人間は、長い目録の禁止項目を苦心して暗記すべき存在であって、その違反に対する苛酷な処罰のみによって行為が規準され得ると信じようである。彼が日本占領の三年半から学んだことはおそらくこの点である。強力な権力と露骨な暴力が、どうやって秩序を維持し個人を統制し得るのかを生々しく教わったのである。ここにもう一点を付け加えると、お金の威力と所有欲望の主体として人間を把握する彼の考え方である。所有を境に、財産の有無が個体をどのように変化させ得るかに対する冷静な観察者としての李光耀は、資本論を真逆に読んだ社会主義者である。

西欧近代を技術の近代に把握して、それを専有するための涙ぐましい努力のあげく、いわゆる「一流国家」を作り出したが、その一流国家から胚胎される不満と挫折、不幸福感は李光耀もやむを得なかった。自ら「決して屈せない我らの滴、つまり共産主義者から我らは色んなことを教わった」と言うほど、李光耀は近代の左派的理念と実践に強

い影響を受けた(四一)。自由主義に対する強い否定と批判意識は、おそらくこのような経験とも関係があるように見える。極めて成功的に反自由主義的資本主義を構成したシンガポールと李光耀の経験は、世界史上においても稀なケースである。むしろ、李光耀の自由主義理解は、政治的反自由主義と経済的自由主義の奇妙なる結合でもある。李光耀は、政治的主体としての個人をあらゆる規制と禁忌により縛って、市場では餓死する自由を提供する戦略を追求した。

朴正熙体制は、いくつかの点において、李光耀とシンガポールを乗り越えられない。まず、朴正熙体制は国家自体を巨大資本に構築する戦略の代わりに、財閥に象徴される私的資本の形成を促進する戦略を取った。これは、人民にとっては忠誠の対象が二重に分裂することであり、社会の支配権をめぐった国家と資本の間における亀裂と葛藤を構造化するものであった。私的資本の社会的支配権が貫徹すれば、シンガポールのように高度の統制を規範とする権威主義は混乱する恐れがある。ハイエクの主張によれば、政治的自由もまた市場の自由に基づくものであって、市場の自由が社会全体へ溢れ出すはずである。

つぎに、李光耀と人民行動党は、英国労働党やフェビアン協会のような西欧社会主義はもちろん、マレー共産党に象徴される共産主義を積極的に専有した。李光耀は、自らドグマを否定する実用主義を強調したが、共産主義すらシンガポール国家体制の重要な参照対象として活用された。人民協会のような住民組織をはじめ、労働組合を通じた労働統制、強力な集団主義と権威主義も同じく左派的要素を専有した実用主義路線に沿ったもののように見える。真逆であれ、李光耀は資



本論を理解していた。

反面、朴正熙体制は、冷戦秩序の下で強力な反共主義を規範として自分の支配を貫徹しようとした。朴正熙体制も、共和党を通じて左派的大衆政治を試みたり、経済開発計画などの社会主義的政策を推進したりもしたが、それがシンガポールのごとき大衆包摂までには拡張し得なかった。反共主義は転倒した共産主義のようにも見えるが、その多くは左派の実践を専有し得ず、排除する結果を招来した。朴正熙体制は資本論効果を全く理解し得なかった。その代わりに、彼らは日本、とりわけ戦時期に絶頂を迎えた総力戦体制下の日本が主要な参照モデルであった。彼らにとって、自由主義はまるで「鬼畜米英」のイデオロギーのように見えて、共産主義は国体を揺らがす饒舌に過ぎなかった。

それにもかかわらず、ふたりは相似した脱植民戦略を駆使した。ふたりにとって、「産業化を通じた一流国家建設」こそ戦略的核心であった。政治的権威主義と経済的自由主義を結合した方式も相似した。アジア的価値と韓国的民主主義は、内容において、西欧の普遍規準を拒否しつつ、特殊性を強調するなど、一脈相通する点がかなり多かった。ふたりは、互いに重要な参照対象であったのではなからうか。ふたりとも脱植民独立国家形成を目指したが、自分らの選んだ道が植民母国を模倣する再植民化の道にもなり得る可能性から目をそらしたのである。

英国よりさらに英国たるシンガポール、日本よりさらに日本たる韓国こそが、もつとも望ましい脱植民の道として捉えられた。これを可

能にさせる核心として設定されたのが経済に他ならない。全てが、経済的に還元されることで比較可能になるし、また乗り越えることも可能となった。経済的還元という魔法とは、全てをひたすら数字に還元するものである。世界を数値に還元することによって、ようやく世界は計量可能となるが、このように計算された世界は一直線上のどこかに配置される世界でもある。これが、二〇世紀の脱植民新生国の、相似しつつも同じではない、二つに分かれた道であった。

ホミ・バーバの言葉を借りれば、相似しつつも同じではない差異の模倣にあたる。その差異とは、バーバにとっては植民者の同一化戦略を破綻されるものとして理解されるが、ふたりにとっては、原本との落差のみを確認させる失敗として捉えられるかも知れない。だとしたら、ふたりの道は、近代に魅惑されて植民の眩惑を振り返られない道となるはずである。すなわち、自分の敗北を挽回するため、新たな他者の敗北を作り出そうとすれば、それこそがまた新たな帝国の回帰にならざるを得ないからである。

〈注〉

(一) 李光耀著、柳シホ訳『일류 국가의 길 (一流国家の道)』문화사상사, 六七三頁。

(二) シンガポールは二〇位以内に含まれた唯一のアジア国家である。

(三) 『이강국』리관유, 에어컨과 민주주의 (李光耀, エアコンと民主主義)「

『한겨레신문』二〇一五年三月三〇日。

- (四) 『한겨레신문』二〇一五年三月二五日。
- (五) 『헤럴드경제』(인터넷판)、二〇一五年一月二六日。
- (六) 도널드 그레그, 차미레 옮김 『역사의 파편들』(歴史の破片たち) 창비、二六八頁。
- (七) 李光耀著、柳ジホ訳 『리관유자서전』(李光耀自叙伝) 『문화사상사』、一九九九年、五六頁。
- (八) 同右、六三〇～六五頁。
- (九) 이기훈 「일제하 식민지 사범교육—대구 사범학교를 중심으로」(日帝下植民地師範教育—大邱師範學校を中心に) 『歴史問題研究』第九号、二〇〇二年、六八〇～六九頁。
- (一〇) 『滿洲新聞』一九三九年七月三一日 『한겨레신문』二〇〇九年一月六日から再引用。
- (一一) 前掲 『李光耀自叙伝』五八〇～六六頁。日本軍の英國軍撃破は、シンガポールのエリート集団にとって大きな衝撃であったが、英國の威力に圧倒された李光耀の祖父もまたその結果を死ぬ時まで理解し得なかったという。「大英帝国と、その下地になってくれた全ての価値観、世界最強の英國海軍、英國人船長、彼らの紀綱、彼らの効率性、彼らの制海権、この全てが変な外見の日本人によって破壊され侮辱されたのである。祖父はだらしなない日本人がどうやってその堂々たる勝利を英國人から勝ち取ったかを到底理解し得なかったとおっしゃった」(前掲 『李光耀自叙伝』七五頁)。
- (一二) 同右、八七〇～九一頁。
- (一三) 同右、二四五頁。

- (一四) 同右、一四九頁。
- (一五) 同右、一五〇、一六一頁。
- (一六) 이상주 「이광요의 근대화 리더십 연구—공동체주의적 발전전략을 중심으로」(李光耀の近代化リーダーシップ研究—共同体主義的發展戰略を中心) 『精神文化研究院』、参照。
- (一七) 『京郷新聞』一九七三年二月一七日。
- (一八) 『毎日經濟』一九七三年三月三〇日。
- (一九) 『京郷新聞』一九七七年八月一三日。
- (二〇) 『毎日經濟』一九七九年一〇月一六日。
- (二一) 『京郷新聞』一九七九年一〇月一六日。
- (二二) 『毎日經濟』一九七九年一〇月一七日。
- (二三) 前掲 『一流國家の道』四五四頁。
- (二四) 李光耀 「국제정세력이 있는 지도자 그룹을 이렇게 만들었다」(國際競争力のある指導者グループはこのように作られた) 『月刊朝鮮』二二二月号、二〇〇〇年、四五二頁。
- (二五) 「シンガポールの独立」(社説) 『東亜日報』一九六五年八月一〇日。他にも、一九六五年八月一〇日韓国の言論は、シンガポールの連邦離脱を英國の反インドネシア反共戦線の弱体化を憂慮する記事を満載した。
- (二六) 『東亜日報』一九七八年一〇月七日。
- (二七) 朴ギルソン・金ギョンピル 「박정희 시대의 국가—기업 관계에 대한 재검토」(朴正熙時代の國家—企業關係にたいする再検討) 『亞細亞研究』五三卷一号、二〇一〇年、一四三頁。
- (二八) 姜慶植口述(國史編纂委員會口述史料) 「一九八〇년대 전후 경제

안정화 계획 (一九八〇年代前後におけ經濟安定化計画)」面談者：朴  
키영 (二〇〇五年一月二八日)。

(一九) Mason Kamolpechara, *Reinterpreting Lee Kuan Yew's Asian Values: a Case Study of Nationalism in Singapore*, Master thesis, Seogang Univ, 2012, p.29.

(二〇) Klaus-Georg Riegel, "Invention Asian Traditions: The Controversy between Lee Kuan Yew and Kim Dae Jung", *Development and Society*, Vol. 29 No. 1, 2000, pp. 118.

(二一) 同右 p.81.

(二二) 『毎日經濟』一九七〇年六月一九日。

(二三) 李光耀 「아시아에 있어서의 민주주의와 사회주의 (연설초)」(アジアにおいての民主主義と社会主義(演説抄)) 『思想界』一一月号、一一六頁。

(三四) 『京郷新聞』は、李光耀が左翼的ではあるが、徹底した反共主義者であり、反白人・反西欧的人物として紹介した。アジアの小魚が団結して西欧の大魚の餌になることを免さなければならないという内容の演説も紹介した。英国留学から帰って以来、反白人闘争を主導したり、労働組合のための弁護活動をも紹介した。首相に就任したあと、エリザベス女王の写真をはがすなど反英、反白人政策の執行も紹介した。中国とインドネシアとの関係を強調するなど、実利主義に立脚した非同盟路線をも説明した(「세계의 지도자 (世界の指導者)」『京郷新聞』一九六六年六月一八日)。

(三五) 前掲『一流国家の道』一六二〜一六四頁。

(三六) 同右、一六六〜一六八頁。

(三七) 同右、一七三頁。

(三八) 同右、一八一〜一八二頁。

(三九) 同右、一七三頁。

(四〇) 同右、一八四頁。

(四一) 同右、一九九頁。

(韓國国史編纂委員会)

(立命館大学文学研究科博士後期課程)